



エスノメソドロジーと法

檜村, 志郎

(Citation)

法と社会へのアプローチ (Series law in action;1):79-97

(Issue Date)

2004-10

(Resource Type)

book part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006521>

※ この論文ファイルは印刷不可です。



エスノメソドロジーと法

●——法の社会学的研究にはさまざまな方法がある。エスノメソドロジーとは、一九五〇年代にアメリカの社会学者ハロルド・ガーフィンケルが提唱した新しい研究視角である。その方法の内容も、一般の社会研究方法とはかなり異なるものである。この章では、エスノメソドロジーとよばれる方法をなるべくわかりやすく紹介しよう。

1 エスノメソドロジーと会話分析

「エスノメソドロジー」の語はガーフィンケルによる造語であり、「エスノ」という言葉と「メソドロジー」という言葉から成り立つ。まず「エスノ」という言葉は、「人々」や「民俗」を意味し、「エスノグラフィ」（民俗誌）、「エスノメディシン（民俗医学）」、「エスノボタニ」（民俗植物学）などの用例がある。それは、社会集団のなかで共有されている知識や方法を示すために用いられるものである。つぎに、「メソドロジー」は、「方法」を意味する「メソ

「学」を意味する「ロジック」が付加されたもので、「方法論」と訳される。そこで「メソドロジック」とは、ものごとをおこなうための方法とその体系化を意味する。以上から、「エスノメソドロジック」とは、ある社会集団において共有されている、ものごとをおこなうための方法の体系を意味することになる。すぐあとで説明するように、こうした方法は慣習的にまた集団的に行使される。エスノメソドロジック的研究法は、社会のなかで共有されている知識とその慣習的・集団的行使に関心を向けていこうとする研究方法である(＊)。

＊ 社会集団のなかで共有される方法が慣習的・集団的に行使される局面は多々ある。その一例は、発話交換を通じたコミュニケーションである。「会話分析」は、こうした考えにもとづき、エスノメソドロジックの展開のなかから一九六〇年代にあらわれてきた領域ないし研究方法である。ガーフィンケルの影響を強く受けながらも独自の研究路線を歩んだ若い世代の研究者であるハーヴィー・サックスらが基礎をつくった。会話分析は、日常的会話やさまざまな職場面のなかで用いられる発話交換を対象とし、その遂行方法を解明しようとする研究である。本章では、会話分析の方法についてはとりあげないので、樫村志郎「一九九六」、同「二〇〇四出版予定b」や、山田・好井・西阪「一九九九」を参照してほしい。

どのような社会集団も、ものごとをおこなうために共有された、さまざまな方法を発達させている。そして、たいていの行為は、慣習的に・集団的におこなわれなければならない。エスノメソドロジックは、社会的行為を、そのような共有方法の、慣習的・集団的行使として研究しようとするものであるといってもよい。法もまた、一面では、社会のなかに共有される知識の

体系であり、慣習的・集団的に運営される制度である。だから、エスノメソドロジの関心の対象のひとつは法の維持や運営の方法であつたし（櫻村志郎「一九九八」）、この研究視角は法の研究にもっと役立てられてよい（櫻村志郎「一九八九」）。

本章では、エスノメソドロジと会話分析において発展してきた問題関心のもとで、実際に法の研究をすすめるさいの「ものの見方」をあきらかにしたい。

2 自然な理解可能性

エスノメソドロジと会話分析研究の前提となるのは、たいていのものごとにはそれを達成するための共有された方法があるという事実である。

個人かぎりでおこなうと考えているような行為も、それと意識されることなく共同で遂行されている。このことを実感するには、つぎのようなことを考えてみるのがよいだろう。個人がおこなうほとんどの行為は社会の他のメンバーに実践的に十分な程度に理解可能であるが、その基礎は、行為が社会的に共有された方法で遂行されていることにある。

たとえば「歩くこと」も社会的現象である。歩行という行動を、手足の調整された動きとしてのみ理解すれば、それは個人かぎりの現象であるといえるかもしれない。しかし、歩行行動をこのようにのみみなすことは、ひとつの選択を含むものである。別の視点をとれば、歩行は、手足の運動にとどまるものではない。

まず、ほとんどの歩行は、買い物をするとか、通学するとか、ハイキングをするとか、パト

ルールをするとかという、實際的目的のためにおこなわれている。特別に鋭い観察者でなくとも、服装、歩行の速度、視線の動きなどから、誰もがこれらの歩行の区別をおこなうことができるだろう。ということは、歩行は、手足が順序よく動くということにとどまらないわけである。それは、社会的側面をもつといってよい(*)。

* たとえば、マックス・ウェーバーは、社会学の固有の対象は「内面的状態や外的行動」ではなくて「行為」であるとしてつぎのように述べたが、このとき本文にいう「社会的側面」に注目するよう提案していたと解釈することもできる。しかし、ウェーバー自身は「社会的」行為をもつと狭く定義した(ウェーバー「一九六八」三六頁)。

「この『行為』(意識的な不作為や忍容を含む)というのは、われわれにとつては常に次のようなものである。つまり、『客体』に対する行動のうちで理解可能なもの、すなわち、たとえ多かれ少なかれ無意識であつても、なんらかの『懷かれた』あるいは『考えられた』(主観的な)意味をもった特殊な行動のことである。〔たとえば〕仏教の瞑想やキリスト教の心情的禁欲は、行為者たちにとつて『内面的』諸対象へと、また人間による物財の合理的な経済的な処理は『外的な』客体へと、それぞれ主観的に意味をもつて関係させられる」(ウェーバー「一九六八」一六頁)。

ほとんどの歩行場面において、この社会的側面は重要である。というのは、ほとんどの歩行は、潜在的に他者と共有されうる空間を利用する行為であるからだ。一人静かに裏町を歩いているときでも、われわれは他人の敷地に入り込んだりしないものである。そこには潜在的であ

っても他者との空間的調整がなされているといえる。まして、実際に他者と共有されうる空間、たとえば繁華街の込み合った道の歩行をおこなうためには、かなりの調整が必要になる。

混雑している場合、歩行の社会的次元に着目することは実践的にもかなり重要である。駅前の混雑した横断歩道を横断するさいには、人々はでたために歩行するのではなく、直前の人のあとにつづくという方法をとっている。より詳しくいうと、直前の他者が移動した後のスペースに自己の身体を移動させるのである。このような状況で、複数の人の身体の連続した移動のパターンは、ふつう「人の流れ」とよばれる。混雑した駅前の横断歩道や、登下校時の学生の横断などを観察すると、こうした方法は、ふつう誰もががたがたしている方法であることが容易にわかる(*)。

* ある入門書 (Livingston [1987]) では、込み合った横断歩道の渡り方という現象がとりあげられている。

つぎの文章は、ある法学部学生が駅のホームで列車からエスカレータをへて出口に向かう人の流れを観察したものである。通学にいつも使う駅であり、通学時間帯の混雑した流れがえがかれている(*)。

* 以下の本章で用いる報告は、二〇〇〇年春に私のゼミの主として新入学生（法学部三回生）におこなわせたものである。ゼミ生全員に「来週までにルールの存在すると思われる状況をフィールドノーツの形式で書いてくるよう」命じた。この実習にもとづく入門として樫村志郎 [二〇〇四] も参照。

〈報告1〉

電車のドアが開くと約八割の乗客が降りる。ドア付近の二、三人は飛び出してエスカレーターへと向かう。二両目以外の車両から降りた人もほとんどの人がエスカレーターへと向かう。約半数の人が片手に定期券を持ってエスカレーターに乗る。エスカレーターの幅は一段に大人二人が乗れるぐらいである。「エスカレーターにお乗りのさいは必ず手すりをお持ちください」というアナウンスにもかかわらず手すりを持つ人はほとんどいない。エスカレーターに乗った人は立ち止まらずに歩いていく。それでもエスカレーター入り口付近では人の流れはスムーズではない。電車を降りてからエスカレーター入り口まで行くにはのろろと歩くしかない。エスカレーターに乗るときは、左右どちらかにより急ぎの人が歩いて通れるように片側をあけておくのがマナーとされているが、皆、一段に二人ずつ乗っている。エスカレーターに人が乗り始めてから一分ほどするとエスカレーターを歩く人がいなくなる。ただしエスカレーターに乗っているとき、前の人が一段詰めるように昇ると、次の人も詰める、というような動きがあちこちに見られる。それでも依然として一段に二人ずつ乗っていることが多い。約二分後にはエスカレーター付近の混雑はなくなる。エスカレーターには一段に一人ずつ、前の人からは一段おきという具合に人が乗る。エスカレーターを降りるまで立ち止まっており、歩く人はいない。

ところで、このとき社会学上きわめて興味深い現象がみられる。それは、ほとんどの歩行者

がそれぞれ、他の歩行者が同じこの方法でエスカレーターに乗るであろうということを信頼し、それにもとづいて行為していることである。

社会学の基礎的問題のひとつに、秩序問題というものがある。それは、自然状態（何の制約もない状態）では、人々の間の共同は不可能であろうのに、いかにして、多かれ少なかれ人々の間の共同作業の体系としての社会秩序が成立しうるのだろうか、という問題である。一九五〇年代に社会学者タルコット・パーソンズは、社会の人々の間には共通言語があり、それにより意思の疎通と欲求の相互調整が可能になる。この基盤の上に社会秩序が成立するのだと考えた（パーソンズ「一九七四」、スプロンデル編「一九八〇」、樫村志郎「一九八九」、浜日出夫「一九九八」参照）。

しかし、人々が混雑した駅を歩行するさいには、前もって具体的にどこをどう歩くかなどについて、意思の疎通と欲求の相互調整がおこなわれているとは考えられない。人々は、歩くことと同一の場面のなかで、歩行を可能にするための調整をおこなわなければならない。そのような調整を可能にするメディアは、ふつうの意味での言語ではなく、人の歩く方向や目標がその場で即座に理解できるものだ、という事情にかかわるものである。実際、この記録自体において、記録者は人々と同じく歩行しながら観察をおこなっていると思われる。

3 ルールによる秩序？

秩序問題は、人々がいかにして共通規範を創造し、理解し、従うかという問題を含む。たし

かに、子どもや旅行者がはじめて混雑した街や駅を歩くとき、人の流れに乗ることに困難を感じるものだが、これは子ども等は街の歩き方のルールを知らないためであるということもある。しかし、すぐあとに述べるようにこの種の困難はルールを知っているかどうかとはかわりがない。〈報告1〉の観察でも、「エスカレータの片側をあける」というマナー（ルールの一種）は守られていないとされているにもかかわらず、この状況にはある一定の社会秩序がみられるのである。

パーソンの考え方に影響された人々の一部は、ルールが個人的欲求の社会的調整の条件であると主張している。しかし、実は、ルールというものが用いられる状況を思い起こしてみると、ルールには社会的欲求を調整するという機能を果たしていない場面がけっこうあることに気づく。つぎの観察は、やはり学生がすしづめ状態のバスのなかでのあるエピソードを記述したものである。

〈報告2〉

大学に入って二年目の春頃、二時限目の授業に出ようと一〇時過ぎに駅前からバスに乗った。およそ午前中の大学行きバスはいつも混雑し、この日も当然混み合っていた。私はバスのちょうど真ん中あたりの場所で、進行方向左を向いて吊り革を左手に、鞆を右手に持つて立った。私の左側には留学生らしい青年が立っていた。彼は白いシャツにブルージーンズという服装で、身長は私と同じくらいだろうか、手荷物はなく座席の肩の取っ手に

片手でつかまって立っていた。彼の手の届く範囲の吊り革はすべて他の人が持っていた。バスが大きな曲り角に来たとき大きな揺れを感じたが私は吊り革につかまっていたので、私自身にはさほど問題はなかった。しかしその時、私の左にいた彼が、私が握っていた吊り革をさらにつかんできた。しかも吊り革の「革」の部分ではなく「輪」の部分である。私は一瞬彼の方を見たが、彼もこちらを見ていた。揺れが収まった後も彼は吊り革を放そうとせず、私もそれ以上彼の方を見ることもなく二人で一つの吊り革にしばらくつかまっていた。バスが二つ目のバス停に到着した時、私はついにその違和感に耐えられず吊り革から手を放した。私はつぎの法学部前でバスを降りたが、彼はまだバスに乗っていたようだった（つぎには別の学部最寄りのバス停がある）。

つぎの記述は、ある司法試験予備校の自習室でのエピソードである。ここは、本を読んでいる「福耳の」男性、携帯を無音モードにしメールを打っている「セミロングの」髪の女性、六法を出してお弁当を食べている女性がいるとされる。

〈報告3〉

（自習室の外の）エレベーターのほうで女性の声がしました。響いて何を言っているのかは分かりませんが、高い声と大きな笑い声が聞こえます。福耳の男性は本を読むのをやめ、エレベーターのほうをじっと見つめています。セミロングの女性もメールを打つのを

中断し、同じ方向を見ています。少し遅れて、お弁当を食べていた女性も後ろを振り向き
ました。

〈報告2〉では「(少なくとも) 大学行きのバスのつり革はひとりですべて利用する」というルール、
〈報告3〉では「自習室では(何をしてもよいが) 静かにする」というルールの存在が観察さ
れている。そして、たしかに、ルールを知らない人の行為によってそのルールがやぶられてい
ることが記述されている。ルールの存在が社会秩序の必要条件だと感じる人々は、ルールを防
衛し、違反者に社会的非難を加える行動が起こると主張する。たしかに、一部の人が非難の身
ぶりを示している。しかし、広く観察されていることだが、通常、ルール違反にたいする非難
はルールに従う行動を実現するためには十分に強力ではない (Krisuse [1964]、ルーマン「一
九七七」六三頁以下、六本佳平「一九八六」)。これらの場合もそうである。

より重要なことには、ここではつぎのような行為がみられる。第一の記述では、ルールの違
反が「留学生」によってなされたものであることが特に記述されることを通じて、なぜそのよ
うな違反がなされたか等の理解が達成されているように思われることである。〈報告2〉では、
違反は、日本社会のルールを知らないことによって引き起こされたものとして理解されている
のである。そのような理解は、ルールの存在を前提とする理解である。〈報告3〉では、自習
室の外にいた人が自習室でのルールを知らないことによって、違反が引き起こされたという説
明が暗黙のうちに与えられていると感じられる。すなわち、ルールがやぶられた場面でも、

人々はその同一のルールを依然として完全に妥当なものとし、行為を理解するために利用していることがみてとれる。

こうした記述の検討からは、ルールが社会秩序の必要条件であるという考え方は、全く異なるルールの把握の仕方ができることがわかる。つまり、ルールとは、ある行為にたいして「あるものからの違反」としての理解を供給するための人々に共有された方法なのである。

4 ルールがもたらす失敗

横断歩道を観察したり実際に渡って見てとれる興味深い現象のひとつは、歩行調整の失敗である。先に紹介したパーソンの理論では、社会的紛争や失敗は、主として、規範が十分に内面化されず、ルールが遵守されないことの結果として社会秩序が毀損されることとして理解されていた。しかし、現実起こる失敗は、人々が共有する方法を守ることによって生じるか、あるいは、人々の共有する方法と対立する別の方法を用いる行為によって生じるのである。

〈報告4〉

私は「図書館では静かにする」というテーマについての記述をするための観察をおこなうために学校の図書館の閲覧室にいた。その部屋の中では、本をめくるパラパラという音や、人のせきばらいやくしゃみ、カバンを開けるときのジッパの音やマジックテープのバリツという音、さらには本を置くときのボタンという音や紙をそろえるときのトント

という音でさえも響きわたっていた。また、室内を歩いている人の足音、靴とじゅうたんがこすれて出るサツサツという音や、歩くさいに起こる衣服のこすれ合う音、または筆箱からペンまたは消しゴムなどを取り出すさいのガチャガチャという音など非常にさいいな音がこの部屋にいと、よく耳についた。私が観察をおこなっている間の人の出入りは結構激しい。カバンを肩に掛け、紙袋を手に持った男性がドアを開けて入って来た。サツサツという足音をさせながら、周囲を見回して席を捜し、空いている席を見つけ、いすをそつと引き、腰掛けた。そしてカバンの中から筆箱や辞書を取り出し、ゆつくりとそれらを机に置いた。まわりに気を遣っているように見えたが、それでも音は結構聞こえてきた。それからしばらくするとある男性が緊張をほぐすかのように腕をグルグルまわし、肩をもんだりしながら、部屋から出ていった。そうするうちにも紙をパラパラとめくる音が部屋の中で響いている。また、友達らしい二人の女性がお互い顔を見合わせて、いすから立ち上がり、いっしょに部屋を出ていった。すると部屋から出てすぐに何事か話を始めた。一方、部屋の中では、何事か言葉を交わす男性の声が聞こえてきたが、それは内容を聞き取ることができないほどのボリュームであった。

この記述者は、人々が「図書館では静かにする」というルールを守ろうとすることから、図書館のなかではルールの違反が観察されやすくなるという現象に気づいている。もちろん、ルールが守られていることによってこの図書館のなかは（たとえば）学生食堂にくらべて静かで

ある。だが、注目すべきことは、ルールを用いることで、その違反が観察できるということである。ルールの存在が違反の発生の前提条件なのである。

〈報告5〉

あてもなく町をぶらついていた正午、ばったりであった友人のMとお茶を飲むことになった。彼女は実家から遊びに来ていた祖母を駅まで見送った帰りだといっていた。

その日の彼女は、普段はパンツを好んではいているのが、珍しく上品な深いグレーのひざ丈のボックスブリーツスカートをはき、しわのない白シャツのボタンをとめてその中に入れ、淡く明るい若草色の丸首カーディガンをおつていた。

この記述者は、友人がふだんの服装と異なったルールにしたがっていることの原因を、祖母を見送るという行動目的に関連させて理解しようとして提案している。つまり、この記述によると、友人のルール「違反」はある意味で「違反」ではなく、ふだんとは別のルールに彼女がしたがったことの結果なのである。

混雑した横断歩道でも、ある横断者が他の横断者が占めようとする空間を占めようと移動してくることがある。またときには、対向する横断者同士が同じ空間を占めようとするところがある。社会学的に興味深いことは、これらの失敗は、横断歩行の方法が守られないから起こるのではなく、逆に、人々が同じように横断歩行の方法を用いることによって発生すること

である。他方、こうした失敗は、ある歩行者が横断歩行の共有された方法とは別の方法にしたがい、たとえば、横断歩道を斜に直線的に横断しようとする場合にも起こる。

第一の種類の失敗は〈報告4〉で記述されていたものであり、失敗の可能性は人々が共有する方法としての秩序のシステムに内在している。第二の種類の失敗は〈報告5〉で記述されたものであつて、失敗の可能性は、人がしたがう秩序のシステムが複数あることによつて生じる。いずれの現象も、特定のルールのシステムが人々によつて内面的に支持されている度合いや、違反にたいして人々が非難を表明する程度等、パソソズがルールの秩序維持作用とみなした現象とは全く関係がない。人々がある特定の規範を内面化しているという行為モデルは、多くの社会学理論の核をなしているが、それは多くの現実にかかる秩序現象を説明するには適当とはいえないと思われるのである。

つぎの記述は、人々の行為は、むしろ、複数のルールの間を調整しようとする努力に関連して説明できると提案している。

〈報告6〉

私がこの電車の中で観察したかったことは、乗客が自分の座る位置を決定する方法にあると考えられる一定のルールである。このとき、乗客には二つの全く反対の心理が同時に働いていると考える。一つは出来るだけ他の乗客からは離れて座ろうとする心理であり、もう一つは後から座る他の乗客のために、できるだけ詰めて座ろうとする心理である。そ

それぞれの心理の強さは、いくつかの要因に影響されると考えられる。例えば他人に近づく事への抵抗が強ければより離れて座ろうとし、弱ければ比較的隣に近い場所をえらぶだろう。隣の乗客との親しさも影響する。たいていは見知らぬ他人であることが多いだろうが、知人である場合でも親しさによって身体的距離も変化するだろう。また、電車の混み具合も重要な要因であると考えられる。電車が空いていれば、詰めて座る動機は減少し、隣から離れて座りやすいが、電車が混んでくると、次の人のために詰めて座らなければと言う心理が強まると考えられる。最初に座ったときにはすいていたのに、座っている内に混んできた場合、一度選択した位置を修正することもあり得る。座る位置を決定するさいの、相反する二つの心理の裏には、社会のルールがあると考える。出来るだけ離れて座ろうとする心理の裏側には、もちろん他人とあまり接近するのは嫌だという気持ちもあるだろうが、同時に他人にあまり接近するのは失礼だというルール、もしくは自分がされたくないことは人にもしないというルールも働いているのではないだろうか。反対に、できるだけ詰めて座ろうとする心理の裏には、座席は詰めて座るものというルール、さらに深めれば、人にしてほしいことは進んで自分から行動するようにというルールが働いていると考える。

このように、エスノメソドロジー研究は、人々に共有されるルールや方法が共同行為のなかでいかに実現されていくかに第一次的な関心を払う。

5 法という現象に向けて

これまで述べてきたことをまとめると、つぎのようになる。人々がいくつもの方法を共有しており、それらの場合に応じて相互に信頼しつつ適用しあっているという事実がある。エスノメソドロジー研究は、そうした方法の共有と共同適用の事実が、社会秩序の成立そのものであることに着目する研究である。そうした方法の共有が維持されるならば、その人々は社会的にあるいは個人的に有意義な実践的目標を達成することができることになる。抽象的にいうと、「人にしてほしいことを進んですること」と「人にしてほしくないことは人にもしない」ことを調整するという実践的目標が達成される。それは、社会的に有意義かもしれないし、個人的に有意義かもしれない。その価値はさまざまであるが、人々はその実践的目標を達成しようとするかぎりでこの方法の共有を信頼し維持しようとしている。エスノメソドロジーは、こうした現象に関心を払うのである。

エスノメソドロジーは、人々が実践的に共同してある方法にしたがうという現象の研究である。このように考えれば、法がエスノメソドロジー研究の重要な対象であったことが当然のこととして納得できるだろう。法は、まさに、ある種の衝突を回避したり対立する利益の調整をはかるために、人々の間で共同して守られることを本質とする現象だからである。法は、エスノメソドロジーのひとつの現象にほかならない。

念のために、法のエスノメソドロジー研究はどのような研究ではないのかを明確にしておく

ことは有益だろう。

第一に、法社会学研究のなかには、実定法や法理論の内容だけを論理的に分析したり理解したりするにとどまる研究がある。実定法や法理論はたしかに社会的産物であるし、社会のイデオロギー等を反映した法的記号表象として、法社会学研究の対象となりうる。だが、こうした研究は、実定法や法理論をその使用の状況から切り離して独立のものとして扱い、それらが、特定の問題にかんしてその場で現実社会をどのような仕方で形成維持しているかを直接に問うことがない。法的記号表象はその使用のコンテキストから切り離され、社会のあり方を反映していることが暗黙に仮定されているにすぎない。これにたいして、エスノメソドロジー研究は、法的記号表象が、具体的場面のなかで、いかにして社会秩序を達成しているかを問うのである。

第二に、法社会学研究には、実定法や法理論の実施過程を、因果的に解明しようとするものがある。実定法や法理論によって規範的に要求される行動が実際にとられるために寄与するすべての社会的原因が、こうした研究の対象になる。たとえば、強制力の配置、行為者の意識、集団の文化などについて、その行動への寄与力が評価される。だが、こうした研究は、社会の人々が、社会秩序を自らどのように形成維持しているかを直接に問わない。こうした研究では、社会の人々は、法規範を知り、記憶し、内面化してそれにしたがう習慣を発達させていると、前提している。ところが、社会の人々の行為は、きわめて意識的に組み立てられている反面で、その組み立てのなかで実定法や法理論が占める比重はかなり軽いのはあきらかである。したが

って、こうした研究は、社会の人々が自らの行為をどのように組み立てているか、その方法をあきらかにするものではないというほかはない。これにたいして、エスノメソドロジは、人々が、他者とともにある社会秩序をどのような仕方で実現維持しているかの実践の様相をあきらかにしようとするものである。

以上の叙述を通じて、エスノメソドロジは、法をどのようにとらえようとするのか、その概略はあきらかにできたと思う。法のエスノメソドロジは、法をその形成、維持、適用の現場において観察する。それは、共同理解を媒介として法を用いることで人々がどのように社会秩序を達成しているかを、問うのである。

【参考文献】

- 浜日出夫「一九九八」『エスノメソドロジの原風景——ガーフィンケルの短編小説「カラートラブル」』山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジの想像力』せりか書房。
- 樫村志郎「一九八九」『もめぐと』の法社会学』弘文堂。
- 「一九九六」『会話分析の課題と方法』『実験社会心理学研究』三六巻一号。
- 「一九九八」『法社会学とエスノメソドロジ』山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジの想像力』せりか書房。
- 「二〇〇四a」『法現象の分析』山崎敬一編『実践エスノメソドロジ研究入門』有斐閣、一四三—一五六頁。

——「二〇〇四出版予定」『会話分析による研究——裁判過程の分析』宝月誠＝森田洋司編
『逸脱研究入門』文化書房博文社。

Livingston, Eric [1987] *Making Sense of Ethnomethodology*, Routledge & Kegan Paul.

パーソンズ、タルコット「一九七四」『社会体系論』（佐藤勉訳）青木書店。

六本佳平「一九八六」『法社会学』有斐閣。

スプロンデル、W・M編「一九八〇」『往復書簡・社会理論の構成——社会的行為の理論をめ
ぐって』（佐藤嘉一訳）木鐸社。

ウェーバー、マックス「一九六八」『理解社会学のカテゴリー』（林道義訳）岩波文庫。

山田富秋・好井裕明編「一九九八」『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房。

山田富秋・好井裕明・西阪仰編「一九九九」『会話分析への招待』世界思想社。

.....[櫻村志郎]